

【高岡税務署長賞】

「『ありがとう』は届かないけれど」

富山県立新湊高等学校二年 増原 羽紗

税金と聞いて、すぐにそのありがたみを感じられる人は少ないだろう。私自身も以前はそうだった。ただ国にお金を取られるだけ、というくらいの印象しかなかった。しかし、ある体験と一つの災害を通して、私は「税金の力」を実感することになった。

今年の一月、私は手術を受けることになった。大きな手術ではなかったが、お金がどれほどかかるか、家族も心配していた。ところが、実際には医療費は無料で、支払いは一切なかった。あとで知ったのは、これが「子ども医療費助成制度」によるものであり、税金によって支えられている制度だということだった。

さらにその後、申請していた保険金として十万円が支給された。これは私が入っていた医療保険によるものであり、税金とは別の仕組みである。だが、この二つの体験を通じて私は、「お金の仕組み」の大切さを強く感じた。そして、その土台となっているのが税金であることに、深い意味があると思った。

税金は、教育や医療だけでなく、道路や橋の整備、上下水道の管理、ごみの収集、消防や救急車の出動、警察による治安の維持など、日常生活のあらゆる場面で使われている。だが、その存在を強く意識するのは、自分が本当に困ったときだ。

二〇二四年の元日に発生した能登半島地震では、多くの人が家を失い、水や電気、食料の供給が止まった。そんな中、自衛隊が被災地に入り、道路や住宅の復旧が急ピッチで進められた。避難所や仮設住宅の運営、被災者への生活支援金の支給も、すべて税金によって支えられていた。

自分の手術の経験は「一人の命」を守る支援であり、能登半島地震のような大規模な災害では「地域や社会全体の命」を守る支援が行われている。どちらにも共通しているのは、税金という仕組みが見えないところで人々を支えているということである。

税は「取られるもの」ではなく、「支え合うための仕組み」である。もし税がなければ、制度に守られず、誰かが困っても、誰も助けられない社会になってしまうだろう。私は、自分が助けられたからこそ、そのありがたさと必要性を実感できた。

将来、私も働き、納税する立場になる。そのときには、「これは誰かの安心のために使われるかもしれない」と思って税を納めたい。

税金は、ただの義務ではない。見えないところで命と暮らしを守る、大切な支えであるのだ。